



藤香会だより

第28号

令和2年1月1日発行

発行者

藤香会事務局

092-724-0007

発行責任者

毛屋 嘉明

新年を迎えて

藤香会会長 山崎 拓



令和2年の清々しい年明けに当たり日頃より藤香会の活動にご協力いただいている会員の皆様にご心より感謝申し上げますと共に新年もまたご健祥にてご活躍下さるようお祈りしています。

昨年(2019)の漢字は「令」に決まりましたが、平成から令和への改元は歴史に残る出来事でした。「令和」の典拠は太宰府の坂本八幡宮で行われたとされる歌会で大伴旅人が誦んだ万葉集巻五にある一文からとられたそうです。

お蔭で坂本八幡宮・太宰府天満宮に参詣する観光客で交通混雑が起こるほど一年中の賑いでした。ところで本年の藤香会は一般社団法人として法人格を持つ団体として脱皮することになりました。幸いに賛助会員も53社に増え、藤香会の活動を支援していただいております。それらの企業は藤香会の社会貢献に期待を寄せて頂いています。

そこで藤香会は郷土「福岡」という地名が黒田如水・黒田長政のお蔭で誕生して約400年の歴史を振り返りながら「令和」という元号がもう「人が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」(西日本新聞コラム春秋引用)という意味合いを噛みしめつつ郷土文化の充実・発展に貢献していきたいと思っております。私共と連携している「黒田奨学会」の人材育成、「NPO法人福岡城市民の会」の福岡城跡の再興というそれぞれの目的にも協力しながら、藤香会の役割を改めて考え直す時が来てい

ると思えます。皆様のご多幸をお祈りしつつ新年のご挨拶と致します。

昨年を振り返って

藤香会副会長 毛屋 嘉明



新年あけましておめでとうございます。昨年度は3回の法要も長

高様に来福して頂き、盛大に執り行うことができました。

9月の勉強会は、九大の福田千鶴先生に「黒田騒動の展開―大膳忠臣説を読み解く」と題して、今まであまり知られていなかった黒田騒動の顛末を、独自の観点からわかりやすく話していただきました。

11月の史跡巡りは、姫路広峯神社に於ける「官兵衛神社建立奉祝祭」に合わせて、姫路まで一泊旅行の予定でしたが、諸般の事情により中止となりました。しかし6人の方が個人的に参加されました。また落ち着いてから改めて姫路行きを企画したいと考えています。

また例年5月末に予定しておりました藤香会総会は、長高様ご令嬢の絢子様の結婚式が5月末だということで、一ヶ月後の6月21日(日)に警固神社で行なうことになりました。

ご結婚については、今度長高様が来福された時に詳しくご披露があると思っております。また懇親会の折などに合わせて、新婚のご夫妻も来福され、会員の方にも紹介されると思っております。

昨年(2019)の総会にてご承認いただいた藤香会の一

般社団法人化に向けては、郡理事を中心として、赤坂の公証人役場に申請書を出し、2〜3年度定のチェックを受けています。弁護士伊達先生にも見て頂いておりますので近いうちに受理されると思っています。今年の総会にて詳細報告いたします。

令和元年度の忘年会も82名の会員参加を得て無事終了し、藤香会の多士済々ぶりを知るものとなりました。

さて、2023年8月の長政公没後400年祭の記念事業ですが、あと3年余りとなり、あまり時間がありません。実行委員会の準備委員会を早急に立ち上げ、企画に入りたいと考えています。福岡県、福岡市とも協議を開始し、議員の方々の協力も得ながら進めてまいります。途中経過についても、適宜報告いたしますので、協力のほどよろしくお願い致します。

長政公397回御忌法要

長政公の命日である8月4日に397回御忌法要が博多区千代の崇福寺において執り行われました。

酷暑の中、会員・賛助会員53名と黒田長高様、姫路・廣峯神社の曲淵彌宜様の参列をいただいたの法要となりました。

岩月海洞老師の「五体投地」、読経の中、参列の会員の焼香、そして「表白」があつて本堂での法要を終わりました。

会員はその後、中門より黒田家墓所に移動して長政公の墓前で焼香をしました。

これに先立って崇福寺にある黒田家墓所を清掃しました。梅雨明け(7月24日)後の好天と高温の中、会員38名と一般の人たち10名の48名が参加して清掃を行いました。直前に市役所の草刈りとどなたか分りませ



焼香される長高様

がほんの数日前に墓石前の水鉢の清掃がなされていきました。黒田家墓所を大事に思っていられる方がおられるのは本当に心強いことで、感謝です。大きな木の枝や墓石に掛かる木の剪定で出た枝は小石原から来ていただいた太田会員に処分のため持ち帰っていただきました。これも毎回のことでありがたいことです。

藩校サミット

11月30日、萩藩校明倫館創建300年の記念ということもあり、萩で第17回全国藩校サミットが開催されました。2015年の福岡の大会では藤香会から多くの会員の参加があり、大会を大いに盛り上げていただきました。それ以後毎年開かれる大会にも藤香会の会員が多数参加されています。

会場は萩市民館大ホールです。約900名収容の会場は全国から参加された70藩の藩校関係者や地元の人たちで満員となりました。圧巻は旧藩当主のご紹介です。壇上に20藩の旧藩主の方々が整列されたお姿はやはり圧倒されます。中心はもちろん徳川宗家です。その後、論語素読や書道、合唱の披露と続きました。大会終了後は交流会です。殿様含め約300人の参加者です。実はこの交流会が大会最大の魅力です。もちろん長高様ご夫妻も参加され、2次会にも繰り出しました。

翌日はエクスカッションです。萩の名所をバスや遊覧船でみんなで見ました。あつという間の2日間でした。殿さまを囲んで大いに楽しい時間でした。来年は11月21、22日も両日、栃木県壬生藩での開催です。お楽しみに！



藩校サミットの壇上

歴史勉強会が開催されました

9月20日(金)午後1時30分より福岡市博物館講座室で毎年恒例になった歴史勉強会が開催されました。会員および一般の150名を超える人の出席をいただいたの盛況ぶりでした。

演題は、「黒田騒動の展開」大膳忠臣説を読み解く」と題して、九州大学基幹教育院教授福田千鶴先生の1時間30分を過ぎる講演でした。

最初に山崎拓会長は「勉強会において郷土の歴史について理解を深め、郷土を愛するようになつていただきたい。昨年、西日本新聞に連載された『福博ヒストリア 黒田家7代の点描』で福岡藩の歴史を書かれた時から講師をお願いして、やっと今年実現した。」と挨拶された。

福岡藩は、長政が亡くなった元和9年には大譜代72家、古譜代84家、新修45家があり、1万石以上の家柄は実に7家もあった。忠之は高禄家臣の排除を目指し、その結果として栗山大膳の知行を召し上げ、屋敷を取り囲み一触即発の状態となった。

それは大膳のみならず高禄家臣の排除でもあった。豊後府内の竹中重義が福岡で仲裁に入り、大膳を日田に引き取る。大膳が福岡城を退出する時の人数は500名とのこと。

忠之が凡庸であったかについては、長政の教育にこれからは政務の器用(政務に役に立つ技量)よりも多少、うつけであった方がよいとも言っている。



講演される福田千鶴先生

このことから忠之は、うつけの三代目」と言われ、各藩大名も「うつけ」と認識していた。これが結果的には良かった。幕府は各藩の家中のこと



熱心に講演に耳を傾ける会員のみなさん

は各藩に任せ、幕府は介入せずの方針だったため、大膳は忠之に謀叛ありと訴えて介入させたのである。ただし大膳は黒田家(長政)が徳川家康から感状をもらっているのを知っており、これで改易されることはないと思通していたのではないか。結果的に忠之に謀叛なしとし、一旦領地は召し上げられるが、その日の内に安堵される。

安堵された後は、高禄家臣は忠之から知行を減らされながらふたたび貰うことになる。大膳も盛岡南部藩に流罪となるが、扶持を貰って5里四方歩行自由という寛大な処置となった。

戦国期から近世への過渡期に起きた旧武將団と領国経営をしなければならぬ藩主との軋轢と見る事ができる。

箱寫八郎会員が歴史小説を上梓

平成30年度「九州文学」最優秀作品賞を受賞した会員箱寫八郎さんの著作「筑前ちんちく唄ものがたり(ギヤラクシー刊)が上梓されました。

お住まいの中央区地行を舞台に幕末の足軽の生活、人情などが書かれています。筋が通った文章が簡潔で、人間味のある作品に仕上がっています。

同じ九州文学に投稿された「質札」も足軽の武士としての矜持が悲しい結末を迎える内容です。

お求めは箱寫さんかアマゾンで、価格は1,826円です。箱寫八郎(電話090-6428-8422)。

会員クリック②

播磨についての吉田家



吉田 征則

吉田家は六郎大夫長利(黒田二十四騎)以前は八代を姓としており父の八代道慶は赤松氏の家臣であった小寺則職に附従して、天正年中、八代村萱原に居を構え、八代村に采地四百貫を持っていた。享祿4年(1531)小寺則職が御着城に移ったのに伴い、道慶は姫路城城代を14年間務め、以後、黒田職隆に付随した。長利は天文16年(1547)生まれで黒田孝高公(官兵衛)の一歳年下です。孝高公の母が乳の出が悪かったため、長利の母が授乳しており、孝高公とは乳兄弟に当たります。永祿9年(1566)孝高公より家老・吉田重生の姓を譲られて八代から吉田姓となりました。

二つの吉田家

通常であれば家督は長男が受け継ぎ次男以下は他家へ養子に入るか部屋住みで終わるかですが福岡藩において吉田家は中老職で大吉田(六郎大夫系4000(8000石)と小吉田(久大夫系2500石)ともに家老を出し二家並立して維新まで続いております。ちなみに私は久大夫の系譜です。ではなぜ小吉田(始祖久大夫利安)が成立したか、これには吉田家二代の吉田壱岐重成の妻の背景が関わっております。最初の妻は後藤又兵衛基次の妹で長男の九郎右衛門宗教と次男の健之助定宗を儲けています。3番目の妻である於佐手(父は毛利元就

の九男毛利秀包で母は大友宗麟の娘の引地の「毛利マセンシア」で、十歳で黒田図書直之の養女となり十五歳で重成三十五歳に嫁す)は三男の六郎大夫知年と四男の久大夫利安と四人の女を儲けています。長男の九郎右衛門宗教は野村隼人祐直の女を妻としており嫡男でありますが黒田長政公の遺言により部屋住料新知1000石を賜り馬廻頭を命じられ家督を継ぐことはなりません。これはやはり後藤又兵衛の血縁を残さないという長政公の思いがあったのではないのでしょうか。また、長男宗教は寛永元年(1624)二十九歳、次男定宗は前年に二十三歳で相次いで若くして没しています。これにはなにか不条理を感じてしまいます。これにより吉田家三代は六郎大夫知年が継ぐことになりました。四男の久大夫利安は苦難の時代があり、それがもう一つの吉田家(小吉田)の成立の元になりました。

つづく

新入会員(平成31年/令和元年)

- 一般会員
- | | | |
|------|------|------|
| 恒川政二 | 曲渕克昌 | 中澤慶輝 |
| 稲生幸成 | 前田浩明 | 石田直也 |
| 光井敬子 | 米村旭翔 | 北原毅一 |
| 坪内勇三 | | |
- 協賛会員 53社

集記 編後

今号は記事の量が多く、会員クリックは次号につづきを、ちよっとうんちくは休載します。協賛会員にも多くの社が加盟し、法要や懇親会にも参加いただいて従来とは違った話に興味を魅かれます。

(天本)

ホームページアドレス

<http://toukoukai-kuroda.com/>